友愛と正義

後期の授業もたけなわ、毎年そうなのですが、泥縄で必要文献を読み漁る日々で、なかなか時間が取れずにいます。が、重要な議論ですし、思いついたことを書き留めておくことは、いつか必ず役に立つものです。今の自分にできる範囲で応答を試みようと思います。とはいえ、現時点では思いつきを書き連ねるに終わりそうです。

浦井先生

＞西田に関しては、もっと、命題の起源に入り込んだ主張なのではないか、一層立ち入れば「そもそも主語というものを必要とはしない」そのような意味での「述語的」論理というものを考えているのではないか

ずいぶん読み返していないので、大雑把な話になってしまいますが、西田はまさに「そもそも主語を必要としない」境地を理想としているように思います。主語なき述語の世界が理想ではないか？

たとえば「我と汝」という論文で、我と汝の奥底を掘って行ったら共通の基盤に出会う、と言ってたような。その深みに向けて晦渋な議論を繰り広げる。でも、方向が逆ではないか。私たちはそもそも我も汝もない世界を生きていて、我や汝はそこから派生する制度にすぎない。むしろ我や汝が共有する社会にこそ考えねばならぬ問題がある。謎がある。

我を言葉と論理で掘り抜いても、無が待つだけではないか。というか、実際に彼は無と出会うのです。差異の論理を振り回した挙げ句、差異なき境地を夢見る。そんな論じ方の帰結として、一切は無だと観じるに至る。そこに諦念と悲哀が漂う。本来、我と汝の関係には友愛があってしかるべきなのに。

＞ホワイトヘッド的な緻密な立場というもの、それ自体が一体何なのだ、ということが、これは以前からずっと気になっております。

ホワイトヘッドは言葉と論理の限りを尽くし、ヨーロッパ世界全体を説得せんとした。彼の置かれた立場や教養が、緻密で厳密な語り方を強要した、という側面は確かにあるでしょう。他にも、もっと多様な語り方があり得たはずです。この件にかんしては、また後で触れます。

＞cosmic drive ということ、つまり宇宙的衝動ということが、万人において、どのように
調和するのか。つまり、それは「万人にとっての普遍性」という問題について、どういう位置にあるのか。これは「真」という意味でもそうなのですが、同時に「善」という意味からしてもです。言い換えれば、「幸福」ということについて、ということです。（ちなみに、経済学的に言えば、これはアダムスミスの、神の見えざる手という問題になってくるかと思います。）

幸福にかかわるのが経済学だとしたら、至福を問うのが哲学だと言えるかもしれません。この件にかんしては後で別の形で考えてみます。

村田先生

＞今の私の職場（短大の保育科）で求められる教育内容にも、「遊びと言葉」というテーマは合致してきます。「遊び」や「想像力」や「言葉」と「思弁哲学」とが絡んでいく領域が開けていくように感じられて、とても面白いテーマだと実感するようになりました

なるほど。教育の現場で、これらの諸概念を掘り下げ、かつ試すことは大いに意義がありそうです。

とはいえ私が問題にしたいのは、もっと原初的な場で何が起こっているか？です。子供の世界は大人により守られている。そうではなく、誰も守る者のいない世界、神にすら見放されたような世界で何が起こっているか？

ごく一般的に言って「遊び」とはルールに守られた社会的な諸関係であり、それ自体が社会のルールを学ぶ上でとても役立つ。社会に出て行くためのリハーサルであり、本格的な冒険を前にした小手調べであると、とりあえずは言えるでしょう。学者のやる学問も、大方はこの範疇を出ないでしょう。ホイジンガやカイヨワの遊びにかんする議論はもっぱらこの次元の遊びにかかわる。

この意味での遊びと、ニーチェやハイデガー、バタイユ、オイゲン・フィンクらが説く遊戯としての存在、ないし遊戯としての世界は位相が違う。こちらは実存主義的な世界遊戯とでも言うべきものですね。区別が必要です。

ところで世界の場合も社会の場合も、たんなる遊びとか、そのルールとかで済まない次元が出てくる。すなわち《法》とは何か？この問いが上記の「実存主義」のグループには無かったのではないかというのが、かねてよりの私の疑念です。

あらためて浦井先生のお言葉を引用しますと、それは以下の「菱木先生の問い」と関わる。

＞菱木先生の問い、そのような遊戯が、どのように「例えば美ということとして成り立つとしても、世における善といったことと調和するのか」という問いであった（．．．．．．）この問題は、結局のところ、美ということと真と善がどのように調和するのか、ということになるようにも思われます。

この意味での「調和」は、たんなる遊びの規則に留まらず、もっと根源的な法の問題に抵触するはずです。真・善・美というギリシャ的な理念は、その背景として法への問いとセットになっていた。プラトンもアリストテレスも「法とは何か」と問うています。子供の遊びから大人の遊戯への移行にあたり、この問題が問われねばならない。

しかるに２０世紀の実存主義の流れにおいて、それが問われることはほとんどなかった。ニーチェの「力への意志」がナチスに利用され、ハイデガーが積極的にそれに加担することになったのは、おそらくこの問題と関わっている。

＞言葉以前の原初的な世界とか原初的な経験を思弁することはとても魅力的で、そこにすでに横溢しているのが生成消滅の遊びの世界だと思います。言葉が生まれてくる言葉以前の世界です。

言語以前の世界が「原初的」な世界だと私は思いません。そもそもホワイトヘッドなら、そうした言い方を拒むはずです。いまだシンボリズムが到来していない世界にも因果効果が働いている。原始的とも思える生物にも現前的直接性への視界が開けている。そこには私たちがいまだ言葉や記号として表現できずにいる象徴体系が歴然と存在する。

この意味での象徴体系は動物とも共有可能なもので、たとえば公園でボールを投げると飼い犬が喜び勇んでそれを取ってくる。大得意で飼い主の足元に置く。この遊びに言葉は介在しませんが、たしかに濃厚なコミュニケーションが成立している。子供たちの素朴な遊びも、これに近い。親と言葉で話す以上に、かれらはペットの動物たちと意思を通じ合わせている。言葉が発達するにつれ、そうした身体言語を介した動物とのコミュニケーションを私たちは得てして忘れてしまう。

もっと大局的に見て、そもそも宇宙の運行自体が、あたかも時計仕掛けかと思えるほどの精緻な法則性を示している。そこにはほとんど遊びはない。過酷なまでの法が支配する世界です。ある種の「自由」を享受できるのは、人間や動物のような高度に有機組織化された存在だけです。自由とは、ひいては遊びとは、高度なルールを前提とした戯れであり、途方もなく贅沢な営為なのです。

バタイユのように一切は戯れだと言い切ってしまえば、世界は極めて解り易くなる。これに対してホワイトヘッドは生成消滅する世界の理（ことわり）を求めた。サイエンスの発達とともに、世界を動かす法則に関する知識は深まる一方ですから、彼の理論もまた複雑化を余儀なくされる。しかるに哲学が何かしら意味ある営みたらんとする限りで、こうした複雑化・精密化は避け難いと、おそらく彼は覚悟していた。

上で浦井先生が指摘された「ホワイトヘッド的な緻密な立場」、それはこの問題と関わる。かれの哲学が緻密かつ精密で、複雑極まりないように見えるのは、言語以前の次元で作動している身体を介した世界との関係、その象徴体系を明示化せんとしていたからだと私は思います。そうすることでインド＝ヨーロッパ語族的な主語―述語論理を突き崩そうと企てた。それは論理を貫徹するような形で遂行されるほかなかった。

これは西田哲学の行文が晦渋なのと性質が異なります。西田には、この意味での身体性や象徴体系への理解がほとんどなかった。逆に、そうであるがゆえに、やたら小難しい議論を際限なく繰り広げることになったのではないか。それが私の西田および京都学派への現状での評価です。

＞遊びの宇宙を、その美的ないしは詩的な本性を散文的に思弁するだけでなく、論理的な構図へと体系化しようとしたのがホワイトヘッドだったのだと思います。

ここで村田先生が仰っていることはその通りなのですが、ホワイトヘッドにおける論理の要請は、その根底に身体や環世界への透徹した眼差しを前提としている。それは論理や体系性をそれ自体として第一義的な目的としていたわけではない。結果として、そのような表現をせざるを得なかったということだと思います。そこには倫理的な要請があった。それが後楽園の学会で私が言わんとしたことです。この点が、これまでホワイトヘッド学会では全く論じられてこなかった。

＞人がやっていることは、経済活動にしても組織の活動にしても個人の娯楽にしても（……）もともとのところでは遊びという根源に根ざしているはずです。経済学も経営学もスポーツ科学だって、もともとは遊びに根ざしていたはずの活動を「科学的に」論究しようとしているのです。

ホイジンガは確かにそう考えていたように思います。私もバタイユをやっていた頃は似たようなことを考えていました。しかし今は違う見方をしています。根源的なものは遊びではない、と思うようになった。それはホワイトヘッドの影響かもしれません。根源的なものは秩序への意志ではないか。宇宙はまず秩序を求めたのではないか。そう思うようになった。

＞この根源的な遊びの世界は、原初的な創造への衝動、要するに、何のためという問いを意識する以前にとにかく新たに創造しようという衝動、つまり創造への宇宙的な衝動(cosmic drive)に満ちた活動性といっていいと思います。

ホワイトヘッド哲学に忠実に従うかぎり、原初的なものとは創造、ないし創造への衝動でしょう。それをcosmic driveと呼んでもいいでしょう。ただし、そこに創造されるものとは宇宙の秩序です。宇宙の秩序が確保されて、初めて遊びが許される。決してその逆ではない。最初に遊びがある、という言い方をホワイトヘッドは絶対しないはずです。

秩序への要請こそが有機体の哲学の核心にあるものです。むろんそれは旧弊な秩序を墨守することではあり得ない。宇宙は新しいものとして創造され、新しさへ向けて不断に前進する。その前進の過程に関わるものが冒険であり、冒険の中に遊びを見ることはむろん可能です。が、根源的なものはあくまで秩序である。そして秩序は合理的なものでなければならない。さもなければ無です。合理的なものであるかぎり、それは理論的に解明できる。これがホワイヘッドの信念だと言えましょう。

『過程と実在』の心臓部は命題論だと私が見るのは、それがまさに秩序生成への鍵概念となるからです。人間社会の秩序は命題の設定から始まる。命題は法として共有され、社会を有機組織化する。それがなければ社会は存続できません。私たちはまず生きねばならない。生きるためには食べねばならない。遊びが可能になるのはずいぶん後の段階です。

愛知の学たる哲学はさておき、経済学はまず人民をいかに食べさせるかという課題を担う。法学は社会を暴力から守り、いかに安定的に存続させるかに注意を払う。それは必死の営みであって、決して遊びではない。というか、遊びでは済まない。

＞まるで混沌にしかみえない世界や領域に、普遍性のある秩序や反復的な規則性を見出すことが、知性の働きであり学問の営みですが、世界はそれほど単純に秩序だっているわけではなく、世界のどの領域でもどんな活動でも揺らぎだの遊びだの美的な要素だの偶発性だのと形容するしかないようなものが、その領域や活動の根源に満ちている。それがホワイトヘッドのいう「創造性」であり、「宇宙的衝動(cosmic drive)」であり、彼はあまりこの言葉は使いませんが、その活動性は要するに「遊戯」なんだと思います。

「彼はあまりこの言葉は使いませんが、その活動性は要するに『遊戯』なんだと思います」というのは村田先生の実存主義的な解釈ですね。ホワイトヘッドの体系から、こうした論理を導き出すのはかなり無理があり、それには彼の自由概念や想像力の論理に訴える必要があるのではないか？というのが私の感想です。

＞「私たち体系的でなければならない。しかし、自分たちの体系を開いたままにしておくべきだ」(MT. 6)とホワイトヘッドは言っています。今の体系では記述できなかった「余剰」も、何世代か先に体系内で記述できるようになるかもしれません。しかし、そうなったとしても常にその先には、新たな「余剰」が、おそらくはより深い問題を孕んで、広がっているでしょう。しかし、そうやって知は、そのつど暫定的な体系を提示しつつ、その限界も示しながら、その限界を超える体系を目ざして新たに前進していく。そんな風にホワイトヘッドは考えていたのだと思います。

ここで村田先生が仰っていることはまさに至言なのですが、私たちとしてはホワイトヘッドの体系性への要請が、秩序への強烈な意志から来ていることを忘れるわけには行かない。それが遊びといかに折り合えるのか。実際には、そんなに簡単なことではないのではないか。

むしろ私たちがホワイトヘッドから学ぶべきは、その体系性への意志、秩序への渇望の方なのではないか。むろんそれは素朴な理性礼賛とは縁もゆかりもないものです。また、極東小国で思索する私たちが、その挙措を単純にまねることも意味を成さないでしょう。私たちは自分なりのやり方で、ありうべき秩序への問いを洗練させねばならぬ。それこそが今のあからさまなポストモダン状況において求められていることです。

＞ホワイトヘッドの「命題論」は、「多世界論」とか「可能世界論」として読めると、常々思っています。想像されただけの世界と現実世界との境界が、「命題論」の議論の中で一瞬、希薄になって、有ったかもしれない世界・有りえた世界と、実際に有った世界とのあわいがぼやけて消えていくところがあるように思います。

＞言い換えると、頑固な事実としての実際に有った世界、リアリティの世界と、有りえたかもしれないさまざまな可能性が腹蔵されているポテンシャルな世界とが重なってしまう、重ねてしまうようなところが、ホワイトヘッドの議論の中にあるように思います。無数の多数の世界が、現実の世界と重ね合わさって、現実でもなくピュアなポテンシャルとしてでもないく、時間的世界と永遠の客体の世界とのあわいに架空のさまざなま世界が広がっているように読めます。

＞それはとても面白いのですが、そんな風に「多世界論」とか「可能世界論」のような議論を読みこめるところはホワイトヘッドのいろいろな議論の中でも「命題論」だけのように思います（思弁哲学と想像力を論じた『過程と実在』の第1部第1章にも、そういう読み方ができそうなところが出てきますが）。要するに、「命題論」には、物的抱握と概念的抱握の混成というかたちで「想像力」が世界そのものを構想する方向に展開されていくようなところがあります。

＞守永先生はちょうど「命題論」に取り組んでいて、アリストテレスも読まれているとのことですが、こういうホワイトヘッドの「命題論」の不思議な特徴について、守永先生に切りこんでいただきたい、というのがリクエストです。きっとライプニッツの可能世界論とかベルクソンの図式論とも関係してくると思います。勝手なお願いですみませんが、ぜひ。

以上の「リクエスト」、まさに我が意を得たりという感があります。ただし、いささか難しすぎる要求です（笑）私としては、遊戯の哲学者としてのホワイトヘッドという解釈を貫徹するには、まさに村田先生こそがこのリクエストに自ら応えるべきではないか？という感想を持ちます。ぜひ。

村上先生

> 「思うに命題とは、その意味を共同で担保し、限定し、未来に手渡そうとする善意志なきところでは、無意味に堕すものなのだ。命題の文言に意味が内在しているわけでは更々ない。共同の努力なきところでは、あらゆる命題は無意味の淵に沈む」

＞

＞「未来の法を構想する企て」としての哲学につながって行くと思うのですが、ここでおっしゃる善意志というのは、「万人にとっての普遍性」を持つものである、と考えてよろしいでしょうか。

「万人にとっての普遍性」であり、なおかつこの要請は人間社会を超えて、生命世界全体を牽引すべきものであるとホワイトヘッドは考えているように思います。そこにベルクソンとの接点があり、また両者の独特の進化論的発想につながって行くはずだと考えています。

ところで “pro-position” という概念ですが、以前に村上先生から質問を受けたということもあり、ここで若干の補足を試みておきます。

この語は伝統的に「命題」と訳されてきましたが、それで良いのかどうか実は問題です。原意から考えると、命題とは各人の視座から見て取った世界の像（ライプニッツのいう表象）を切り閉じして「前に置くこと」、それにより世界を枠取りし、見えるものと見えないものを線引きすることです。そこには積極的（ポジティブ）な抱握と、消極的（ネガティブ）な抱握が生じる。

命題化とそれに伴う概念化により、世界は図式化され、デザインされる。そうした命題化へエネルギーを供給するのは欲求であり、ひいては欲望です。一切は流動的な多様体の中で生じている。いくつもの活動が相俟って、活きた有機的な組織体が立ち上がる。それが宇宙の実相です。

「前に置くこと」pro-position と「上に投げること」super-ject は密接に関わる１つの事態です。前か、上かの違いはありますが、それはどちらも脱―自的な運動を表わす。反復される自を出、生成として前へ、上へと超脱する。そこから見えた情景が命題化される。その意味では、命題化こそが存在するものの本質的な働きです。人間は命題化する存在だと見なすことができます。のみならず生命それ自体に、そんな運動性があるのではないか。

前に置かれたものは、自らを他に示す。たとえ提題者が個人でも、命題は万人に共有されねばならない。すなわち「公的」でなければならぬ。命題を介して私たちは自らを表現する。表現の核心には必ずや命題が抱懐されている。人間とは、ひいては生命とは、主体であると同時に自己超越体である。それは命題化により前進する活動体なのです。

ところで主体とは同時にネクサス（隣接体）でもあります。主体と主体の間には絆が想定される。絆とは法でもあり得ますが、まず第一義的に「友愛」（フィリア）と見なさねばならない、というのがアリストテレスの主張です。

ところで、ホワイトヘッドの挙げる卓越した文明の５要件には肝心の自由・平等・友愛が含まれていない。あまりに当然と考えたのか。しかるに平和も美も、自由や平等ひいては友愛という基盤なしには存立し得ないはずだ。友愛なき平和などあり得ない。そして法、法における正義なしには。

ようは、ホワイトヘッドの文明の５要件は最高度に組織化された社会の話で、文明そのものの基礎要件ではない。

１７世紀の天才の世紀を言祝ぎ、近代科学の同伴者であろうとしたホワイトヘッドには「友愛」という次元への理解がなかった。ルソーへの関心も薄い。英米系の哲学者だから、ということもあるのでしょうか。これにたいし同時代のフロイトは、ひどく倒錯した形ではあるにせよ、父殺しにおける兄弟の共犯性に着目している。

友愛は正義に先立つと喝破したのがギリシャのアリストテレスでした。その重大さに気づいたのがモンテーニュで、フランス１６世紀ルネサンスの偉人です。ところが、１７世紀科学革命を牽引したデカルトやライプニッツは、そんな人間的な問題など歯牙にもかけなかった。むしろ前世代のモンテーニュを小馬鹿にしていた。

１８世紀に入って、ルソーが改めてこの問題を取り上げ直したと言えます。が、友愛の概念を無自覚に国家規模に拡大してしまったために、後世に大いなる禍根を残すことになった。フランス革命は友愛を兄弟愛と解釈し、兄弟による父王殺しという、まさにフロイトの図式通りの蛮行を行なうことになる。

１９世紀はニーチェしかいません。２０世紀のファシズムと大衆消費社会の時代、ニーチェの影響のもとにバタイユとブランショが改めて友愛を問う。

むろん、マルクスを忘れてはなりません。来たるべきヨーロッパ、来たるべきコミュニズムは友愛の成否にかかわる。デリダが晩年に考えていたのはこのことです。私たちは「女」の、そして「動物」の友になれるか？

アリストテレス＝モンテーニュは、２つの体が１つの魂を共有するのが友愛だと断じています。これにたいしてデリダ『友愛の政治学』は「差異だ、差異だ」と言い募るばかりで、いっこうに話が噛み合わない。モンテーニュの読解としても至って底が浅い。

とはいえ、そこにニーチェからシュミットに至る「敵の政治学」を対置するのが、この人の真骨頂でしょう。また、そんな分岐の起点としてアウグスティヌスを召喚するところに虚を突かれました。デリダは気づいていないようですが、この神学者は友愛を記号化したのです。それが以後のヨーロッパ文明の動向を決定づける。

去年に引き続き、人間・動物・機械というテーマで授業を始めたのですが、機械の裏面が友愛だと見なすと大変面白いことになる。実際フーリエにおける社会とは愛の機械である。これはヨーロッパ近代の極めて重要な動線なのですが、ハイデガー＝デリダの視野には全く入っていない。

山本義隆『１６世紀文化革命』は畏怖すべき労作ですが、結局１６世紀ヨーロッパ技術史に過ぎない。文化をあくまで技術革命の視座から見ている。この革命をもっぱら牽引したのはアカデミズムの外にいた商人や医者や技術者です。それは否定すべくもない。というか、否定する者など誰もいないでしょう。

とはいえ、やはり１６世紀と言えば、モンテーニュやラブレーです。あるいはシェークスピアやセルバンテスです。かれらが引き起こした精神の革命ともいうべきものが１６世紀ルネサンスで、その意義を改めて科学史や技術史との関係から考えないといけない。それは哲学的にやるしかない。この意味での「哲学」が山本さんの本にはない。あくまで思想史にすぎない。思想史でしかないという点で、それは日本の旧弊な大学的知の枠内にとどまっている。

などという議論を思いつきで話し始めて、このままでは授業が混沌状態に陥りそうなので、あまり深入りはせず、このテーマは来年に回そうと思っているのですが、いい機会ですので、ここで若干紹介しておきました。

言わんとするところは、真・善・美といった高尚な理念とは別に、アリストテレスにはもっと根源的な倫理の次元における友愛への注視がある。それは正義、いいかえれば法との関係で考察されねばならない。この点にようやく思い至ったという次第です。

＊

本日は平常授業がお休みで、若干時間に余裕があり、この機会に書けることを書いておくことにしました。公的な生活ばかりか、遺憾ながら私的生活も混沌状態に陥りつつあり、今日でないと無理っぽいので、乱文乱筆を顧みず、掲示板にアップしておくことにします。